
空中列車 - aerial train -

高戸 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空中列車 - a e r i a l t r a i n -

【著者名】

高戸 優

【あらすじ】

もし死者に逢えるのであれば、貴方は誰に逢いたいと願いますか？

もし生者に逢えるのであれば、貴方は誰に逢いたいと願いますか？

逢いたいと望むのであれば、自然とある駅舎へとやつて来てしまします。

そこで待っているのはキャラが濃い方々。

これはそんな方々の手を借りて逢いたいと想う人へと逢いに行く
そんな物語です。

もし、死者に逢えるのだとしたら。

もし、あの時のことを見えるとしたら。

もし、やつ直せるとしたら。

貴方は逢いたい、償いたい、やり直したい、と思しますか？

「……セーヒ、キミが新しいお姫さんかい？」

そう言いながら、少女はパタンと読んでいた本を閉じる。

年は一二ぐらいだろうか。背は小さく、ぶかぶかの駅長の服で身を包んでいた。袖は彼女の小さな手を隠しており、結構だらしがない格好となってしまっている。

肩口で切りそろえられた黒髪。深い深い緑色の瞳は少しつりあがつてあり、年相応な可愛らしい顔立ちを更に可愛く見せていた。

そんな少女は真っ白な指先にてペジ、と田の前に居る少年を指す。

「このボクが聞いているにも関わらず無言とは度胸だねえ新客さん？」

それを聞き、少年はただ首を傾げるだけ。

年は一五。茶色の髪に黒い瞳、ガクランで細身といつぱりにでも居る格好の少年だ。少し異色といえば、男子にも関わらずファンシーなウサギのマスクをバックにぶら下げている事ぐらいだ。

少年 センザキハヤト 千崎勇人は首を傾げつつ、少女に向かってじつ返す。

「……それ以前にここは何処だよ？」

「分かつていてるくせにとほけるんじゃない。それは他人をムカつかせる所業だ」少女は軽くため息を漏らして「……さてさて、もう一度だけチャンスをやろうじゃないか。さあ、何か言つてみるがいいわ」

「……だから、ここは何処だよ？」

「同じ質問しか出てこないとはキミは実に語い力が富んでいないと見た。……ふう、こんなのが次の秘密とは先が思いやられるね」

それを聞き、勇人は少しだけむつとする。そして「そつちこそこなんだよ！――名乗りもしねえのか！？」

「おつとつと、名乗つていなかつたつけ？……まあ、名乗つていなかつたならば今名乗るまでさ。ボクの名前は桃天トトノウ 夜美。果実の『桃』に天照の『天』、美しい夜さ。実際に面白い字体だろ？　さあ、ボクは名乗つた。だから次はキミの番さ」

「…………」彼は腑に落ちないという表情をしながらそっぽを向き
「……千崎勇人」と不満げに漏らす。

「ふむ……センサキハヤト、ねえ……」

そういうと、少女は田の前にある木製の古びた机の上にあつた書類を手に取りパラパラと眺め始めた。

「や、し、す、せ……センサキ、センサキ……おや、ビリヤリリストには載つていないみたいだ」

「……それって何だ?」

「ん、コレかい? コレは死者に逢いたいという想いを持っている者たちのリストさ。大抵このリストに載つている者がここに来るのはけど……ビリヤリ、キミは死者に望まれたクチらしこ」

そう言いながら夜美はひらひらとリストを振る。その光景を見て少年は眉をひそめて「……それ以前に、ここは何処なんだよ?」

「おや、ここまで言つてまだ分からいとはキミは馬鹿だけでなく阿呆でもあるらじこ」

少女はそう呟くとソソ、と軽い音と共に椅子から地面へと降り立つた。タンタン、と革靴を鳴らして外へと赴く。その後に、少し躊躇つていた勇人も続く。

そして外へ出た瞬間 ぶわっと暖かな風が彼の体を包み込む。

(何だ?) 顔を上げると、桜の花びらが彼の髪に乗つかる。

摘まんで花びらを軽く眺めた。それを見てふつと淡く優しく笑う。

花びらを手中に入れながら彼は夜美の元へと歩いていった。彼女は桜が舞う所で呆れたため息を漏らす。

「早く来ないかい。女子を待たせるとキミは男として最低最悪だ」

「そつちが何の説明も無く行つちまつたからだらうが……」

「全く、折角」のボクが直々にキミが何処か教えよつとしていたのに……」の恩知らず……」

「おい、今小声で何言いやがつた？」

「まあ恩知らず……はおいておいて、だ」

「お前大声で何言つてやがんだよ本当に……」

「そんな小さな事は気にせず、見てみたまえ」ピシッと先ほど今までいた建物を指して「」が、その正体さ

そう言われ、彼はゆっくりと振り返る。建物は古い駅の様な形をしていた。

木造建築で駅名が書かれる箇のプレイトは真っ白なままだ。古びた感じを纏つており、何時でも壊れてしまいそうなレトロな雰囲気を持っている。

勇人はもう一度じつと眺めてから「…………いや、やつぱ分かんねーんだけど……」

「何だつて？ カミはなぜぱり馬鹿で阿呆で無知童貞野郎なのかい？」

「お前はアレか、俺を怒らせてえのか？ 誰が馬鹿で阿呆で無知だつてー？」

「童貞は否定しないのかい？」

「…………」

「ふむ、ボクは血も涙も無い訳じやないからね。深追いはしないでおひづ。まあ、じいの説明だが……簡単に教えるのは実につまらない。そうだ、ヒントを出すから答えてくれ」

少女は腕を上げる。ダボついた駅長の服から真っ白な細い指を五本伸ばした。そしてグーを作り上げてから人差し指だけを伸ばす。

「じいはただの駅じやない」

「そりゃ そつだろ。わざわざからレールはあるつぽいのに電車全く走つてねーし。つーかお前が駅長つて時点で可笑しいから……」

「五点」

「手ひどい答え来たー？」

「一〇〇点満点だから頑張りたまえ。頼むからボクを失望させないでくれよ？ さて、次のヒントだ」中指も伸ばし「駅と駅を繋ぐ場所じやなく、ある世界と繋ぐ場所だ」

「……ある世界って何だよ？ 死者の世界とか？」

「ふむ。一三三点。若干惜しい所へ来ているが……」

「……死者の世界が惜しい？」勇人は何時の間にかマジメに考え始め「……まさか……天国とか、地獄とか？」

「五〇点」

「え、じゃあ一〇〇点は俺が生きてる世界と天国とか地獄とかを」

「ふむふむ、まあ九〇点へら」

「繋げて俺の生きてる世界で死んじまつた奴の魂を天国と地獄へ葬送する場所なのか！？」

「マイナス一〇〇点」

「マイナスつてあり！？」

「行き過ぎだ。途中までいい線を行っていたにも関わらず、キミは実に悲しい少年だよ」ふう……、と夜美は重いため息を漏らす。

「このやり取りを続けても終わりが見えないと思つたのか彼女は手を下ろし「答えを教えるさ」と呆れた声で呟いた。

「ここは一度と出会えないはずだつた、生者と死者を繋げる駅。生者が死者に逢いたいと望めば。死者が生者に逢いたいと望めば。ボク達がその願いを叶える場所さ」

さて、と呟くと少女は妖艶に笑う。年不相応な、怪しく美しい微笑を湛えて彼を射抜いて、小さくそれでもはつきりと囁いた。

「 キミに逢いたい、と願っている人にキミは逢いたいと想うかい？」

ラバット・アイ（1）（後書き）

初めまして、高円 優と申します。

馳文すいません…グダグダ展開すいません…。

少しずつでも更新していくことを想いつので、どうか温かく見守ってください。

次回は話も進むと想いつので…。

では、また逢えましたら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4682z/>

空中列車 - aerial train -

2011年12月15日22時50分発行